

はじめに

千人もの男たちが草原を風と競って駆けた。

一人の男が抜き出ると、皆、なりふり構わず彼に付き従った。

その男こそ、ジンギス・カン。

馬の蹄が激しく砂をたたき、国々に不安と恐怖をもたらした。

稲妻も雷鳴も、彼らを阻むことはできなかった。

(ベルント・マイヌンガー)

二〇〇四年夏のこと、BBCやNBCといった欧米の大手メディアが、興味深いニュースを伝えた。「世界中にチンギス・カンの子孫が一六〇〇万人いる」というのだ。オクスフォード大の研究機関が中心となり、現代人の遺伝子を調べたところ、計算上およそ一六〇〇万人がチンギス・カンに遺伝的系譜をたどれたという。

私はこのニュースを滞在中のモンゴルで知った。まわりのモンゴル人たちは誇らしそうにこの話題に熱中した。しかし、たまたま居合わせたドイツ人の反応は違っていた。ヨーロッパの人々は、このニュースを複雑な思いで受けとめたようだ。彼らにはチンギス・カンに対するネガティブなイメージが、現在に至っても強く残る。

○ チンギス・カンとは、言わずと知れた世界征服者。一二〇六年に成立した大モンゴル国^{イェケ}（モンゴル帝国）の始祖だ。

東アジアではチンギス・カンを英雄視する傾向が強い。彼の故郷のモンゴルでは当然のことだろうが、中国でも国土を蹂躪されたのにもかかわらず、チンギスを中華民族の英傑として称える傾向にある。遠く離れた日本でも、好意的に受け入れられていると言つてよからう。たとえば、悲劇のヒーロー源義経が兄頼朝に殺されたのではなく、難を逃れて大陸に渡りチンギスになったという話を、年配の方なら御存知だろう。

いつぼう、中央アジアやヨーロッパでは、チンギスの一族と武将が率いたモンゴル軍は、「地獄（タルタルス）からの使者」として怖れられた。ヨーロッパ深くに侵攻し、数々の破壊と殺りくを行つたからだ。ポーランドにはワールシュタット（死体の地）というおぞましい地名も残る。当時の史料はモンゴル兵による悪行の数々を伝える。多くのチンギス・カンの子孫がいることは、それだけ悲惨な略奪と凌辱があつたことの裏返しだ。

ニュースの真偽はともかく、このように毀誉褒貶の大きな歴史上の人物は、チンギス・カンを置いて他にいないだろう。洋の東西にはチンギスが登場する史料が数多く残されているが、信頼できるものは数少ない。筆者の深層心理は隠そうとしても言葉や文字の端々に表れる。殺戮された者の数が誇張されたり、創作の英雄譚が挿入されたりと、史実と異なる伝記が残されてきた。もちろん

多くの事実も含まれている。しかし、それをあぶり出すには大変な労力が必要、研究の支障となつてきた。

さらに言えば、生没といった人物研究での基本的な事柄にも不明な点が多い。生年には西暦一五四年、五五年、六二年、六七年というように諸説がある。史料によつて記述が異なるからだ。いまのところ『元史』という正史に書かれ、年齢と出来事の時つじまが合うということで、一一六二年説が一般的に採用されているが、確定しているわけでない。

いつぼう、死去したのは一二二七年だが、その場所や原因は謎のまま。極めつきは、彼の墓所の在り処であろう。歴史ロマンをかき立て、世界中の探検家を惹きつけているが、いまだ見つかつていない。

それ以外にも、どのような服をまとい、何を食べ、どのような住まいに暮らしていたのかなど、生活の基本となる衣食住さえも不明であつた。史料は、まったく言つていいほど、この点に触れていないのだ。本来なら、歴史上の人物の「人となり」を知るには、その人を育んだ生活環境を知ることが重要になる。いままでの研究には、そこがもつとも欠けていた。

○
そこで私は、文字資料だけでなく、遺跡や遺物といった考古資料からチンギス・カンにアプローチすることを企てた。生活復元には考古資料がもつとも有効だと考えたからだ。いまから四半世紀ほど前のことだつた。

はじめは遺跡も少なく、資料は限られ、とても生活を復元することなど不可能な状況であった。しかし、諦めること無く踏査を続けたことよって、チンギス・カンを語る上で重要な遺跡を、あちこちで見つけることができた。

考古資料は、興味の無い人にとってみれば、ただの石ころや土の塊にすぎない。だが、興味があれば、どんなに小さな遺物でも、貴重な宝石に値する。しかも、関心の持ち方やアプローチの仕方を変えることによって、多くの情報を導き出すことができる。とくに、自然科学的な手法を取り入れることで、当時の食生活や自然環境など、これまで顧みられてこなかった事柄までわかるのである。さつそく、私は地球物理学、地理学、生態学、気候学の研究者にコンタクトをとった。

ちようどそのころ、文献史学といわれる文字資料の研究にも新たな動きが起こった。これまでの典籍を中心とするインドアの研究だけでなく、フィールド・ワークを行う人が出てきたのだ。碑文や出土文書など、その当時に書かれ、できるだけ中立的な立場で記された史料を探すようになっていた。出土資料ならば考古学も役に立てそうだ。

そうやって考古学・自然科学・文献史学のコラボレーションが成立した。二〇〇五年のことだ。私がこのプロジェクトのリーダーを務めることになった。

それから一〇年間、一朝一夕にチンギス・カンの謎は解明できないが、少しずつ着実に成果が得られている。それらを一冊にまとめようという話もちあがった。リーダーとして私とその本の編者を引き受けることになった。

こうしてここに『チンギス・カンとその時代』の出版にこぎつけることができた。さまざまな角度からの、現地点でのチンギス・カン研究の到達点を、余すことなく収録できたと考える。もちろん、遠いゴールへの一里塚にすぎないが……。

○

さて、学術書の編者の役割のひとつに、用語の不統一の解消がある。だが、本書で、私はあえてそれをしなかった。それは執筆者の学問的バックグラウンドが多様すぎるためだ。それぞれの立脚する分野の蓄積を尊重しようと思う。もちろん、読者のみなさんが混乱しないようには心掛けたつもりだ。しかしながら、歴史上の地名、人名、部族名などに、不統一箇所がある。御了解いただきたい。

そんな中で、私が唯一こだわった語句がある。それは「チンギス・カン」だ。

この由来については諸説ある。「チンギス」については「宏大」あるいは「寛大」という意味だとする説が有力である。欧米ではペルシャ語文献に基づき「Genghis (ジンギス)」と発音する場合が多く、日本や中国などの漢文史料を重視する東アジア諸国は「成吉思 (チンギス)」と呼ぶ。この点、本家のモンゴルでは「Chinggis」とするので、最近欧米でも「チンギス」を採用する研究者が増えている。

「カン」については、「ハン」や「カアン (ハーン)」と呼ぶ場合もある。「カン」と「ハン」はともに「国王」や「族長」といった意味だ。「カ」と「ハ」の違いは、前者が古く後者が新しいとい

う発音の時期差であるという。一三世紀当時は「カン」と発音されていたようだ。また、「カアン」は「皇帝」という唯一無二の支配者の称号である。そうであるならば、チンギスは当然「カアン」ということになる。しかし、生前の彼は「カン」で、死後に「カアン」と呼ばれるようになったことを、信頼のおける複数の史料が伝える。

それが正しければ、当時、彼は「チンギス・カン」と呼ばれていたはずだ。そこで本書でも、書名や引用記事などで「ハン」や「ハーン」が使われている場合を除き、「カン」を採用する。彼の真の姿とその生きた時代を、ありのままに描き出したいからだ。

○

だが、遠い過去を見つめるだけでは、これからの学術研究は許されない。私たちの研究が国民の血税に支えられているからには、安穩とロマンだけを追い求めてはいられない。現在と未来社会への貢献も視野に入れて進めなければいけない。それでは私たちに何ができるのか。

現在のモンゴルでもチンギス・カンは人々の心の中に息づく。ただし、唯一無二の英雄であるので、「カン」ではなく「ハーン」と呼ばれている。遊牧人口が減り、ゲルから近代的なアパートへと住まいを変えても、各家庭にチンギスの肖像画飾られ、淹れたての乳茶スータイツァイが供えられるのが、モンゴルの朝の光景だ。さらに、酒や食べ物、街路、広場、ホテルの名など、いたるところにチンギスの名が溢れる。旧知のモンゴル人は「チンギスの名が付かないのはトイレットペーパーぐらいだ」と笑いながら言った。現在のモンゴル人にとってチンギスは、歴史上の英雄だけでなく、また、

信仰の対象だけでもなく、もつとも身近にいる家族のような存在なのかもしれない。モンゴルの大地とそこに暮らす人々を理解して、ともに歩もうと考えるならば、まずはチンギスについての正しい理解が必要だとわかる。

日本とモンゴルとの結びつきは年々強まっている。相撲などのスポーツ、学術・文化はもちろん、経済では豊富な地下資源に注目が集まり、政治では中・露との地政学的要衝と位置付けられている。そして今、さらに未来に向けて、私たちはモンゴルとどのようにつき合って行くべきか。それを知るヒントがチンギス・カン研究にはあるはずだ。

白石典之

sample

目次

はじめに	(1)
チンギス・カン関連地図	(12)
チンギス・カン関連年表	(13)
第1章 チンギス・カンの国づくり	1
第2章 チンギス・カン時代の国際関係	29
コラム1 黄河南流	45
第3章 チンギス・カン世界戦略の「道」	53
コラム2 長春真人の旅とチンカイ城	77
第4章 出土銭からみたモンゴル社会	86
第5章 チンギス・カン時代の文字利用	103

執筆者一覧	373
おわりに	367
コラム9 チンギス・カンのイメージ——アンケート調査より——	356
第15章 「チンギス崇拜」と近代内モンゴル	339
第14章 チンギス・カンの墓	312
コラム8 黒河をめぐる攻防	306
第13章 チンギスカン防塁——西夏の北辺防備——	291
第12章 モンゴルの弓矢	277
第11章 武器と防具	262
第10章 モンゴル帝国初期の鉄生産	241
1. 北方ユーラシアの鉄生産	241
2. モンゴル高原の鉄生産	253
コラム7 カラコルム遺跡	234
第9章 チンギス・カン時代の住生活	206
1. 住居と季節移動	206
2. 最初の首都——アウラガ遺跡——	218
第8章 モンゴル帝国の食生活	186
1. 動物遺存体にもみる食生活	186
2. 植物遺存体にもみる食生活	195
第7章 森林と草原の移り変わり	162
コラム6 異常気象に対する災害管理	177
コラム5 モンゴル高原の気候と遊牧都市	157
第6章 中央ユーラシアの自然環境とその変遷	136
コラム4 チンギス・カンの勃興と自然環境	128
コラム3 チンギス・カンを伝える史料	119

おわりに

『チンギス・カンの考古学』。これは二〇〇一年に私が上梓した書名である。当時は考古学界のモンゴルへの関心は浅かった。家も家財道具も残さず、生活用品の一切を携えて移動する遊牧民の研究には、考古学はなじまないと誰もが考えていた。まして、考古学でモンゴル帝国やチンギス・カンの研究などできるはずないと、高名な歴史学者から冷笑されたりもした。

あれから一〇年以上の月日が流れた。毎年夏、モンゴル高原を舞台に十数カ国の考古学者が発掘調査を行うようになり、日本からも複数の隊が参加している。そのなかでドイツ隊はモンゴル帝国の都カラコルムの調査を国を挙げて進めている。また、中国も考古学者を中心とする「モンゴル族の起源と元朝皇帝陵墓探査」という準国家プロジェクトを開始した。さらに、欧米で出版されるモンゴル帝国に関する書籍に、考古学に関する章が立つようになった。そしてここでチンギス・カンに関する専門書の編者を私がしている。時代は変わった。

本書ではチンギス・カンとその時代、すなわちモンゴル帝国時代を、おもにモンゴル高原を対象にフィールド調査を行っている研究者に、その専門の立場から論じてもらった。

第1・2章では、当時のモンゴルをとりまく部族・国際関係と、その征服の過程、さらには征服後の統治のあ

り方について、文献史学の立場から論じてもらった。とかく漢文史料による研究が盛んなわが国では、中国との関連に注目が集まるが、両章ではベルシャ語史料や欧米での研究にも言及し、中央アジアも視野に入れた論を展開している。そこから浮かびあがったひとつのキーワードが西遼である。西に接する強国である西遼と密接な関係があったとしても、何ら不思議ではない。しかしながら、考古資料ではそのあたり明らかになっていない。大オルド跡のアウラガ遺跡からは、西遼をはじめとする中央アジア関係の遺物は、これまでのところまったく出土していない。今後の課題が提供された。

第3章では交通・交易をとりあげた。広大な版図を支配するために、モンゴル帝国でオゴダイの時代に駅伝制(站赤)が布かれたことは、歴史教科書で知られている。その基礎はチンギスの時代にある。どこまでも続く果てしないモンゴルの草原。いたるところが道になりそうだが、じつさいは違う。砂漠や湿地が行く手を阻む。また、飲み水が得られる場所も意外に少ない。おのずとルートは限られる。チンギスはそれらを巧く結んだ。ルートや要衝の多くはその名を史料にとどめるが、それらを正確に地図上にプロットできた例は少ない。本章中に出てくるモンゴル高原から西方への玄関チンカイ城は、その稀有な一例だ。文献史学と考古学とのコラボレーションによる大きな成果である。

第4章では貨幣を、第5章では文字をとりあげた。一見すると異なる二者であるが、貨幣も文字もチンギス以前のモンゴル族は、活用どころか、保有すらしていなかったものだ。それらからは「リテラシー」、すなわち当時のモンゴルが外来文物を、どのように取り入れ、どのように活用したか、人々の意識や心性が明らかになるはずだ。

第6・7章では「その時代」のモンゴル高原の自然環境を概観した。近年、チンギス・カンの勃興の契機を環境変化から論じることが、欧米では研究トレンドのようだ。ただ、意見の一致はみえない。当時は寒冷であり、それによる食料不足が侵略の契機とする意見があれば、温暖乾燥による干ばつこそが原因であるとの見方もある。逆に、温暖湿潤の良好な気候が、強力な騎馬軍団を育んだとする研究もある。いずれも偶然見つけたわずかなサンプルに基づく研究である。私自身も当時の環境に大いに興味があり、二〇〇五年から環境考古学のプロジェクトをモンゴルと共同で進めてきた経緯がある。そこでお手伝いいただいた古環境復元を専門にしている理系メンバーに執筆していただいた。今は地道な試料収集と分析が必要で、性急な結論は慎むべきだと教えてくれる。つぎに、文字資料にはあられわれず、これまで不明な点が多かった衣・食・住について概観した。考古学の真骨頂を発揮できる分野である。私たちのプロジェクトで明らかになった最新の成果を、第8・9章で紹介した。ただ、「食」「住」だけで、「衣」については取り上げることができなかった。これは衣類の出土例が少ないからではない。近年数多くの繊維資料が出土している。私たちのプロジェクトの調査でも出土して、現在分析中である。モンゴル帝国時代の衣類の研究は、現在手探り状態で始まったばかりだが、興味深いデータが得られつつある。後日、稿を改めて検討したい。

第10章では鉄生産について紹介してもらった。私たちはチンギス・カンの勃興とモンゴル帝国の強化の背景には鉄資源確保の成功があると考えてきた。そしてその技術的基盤は中国方面から移入されたものだとしてきた。しかし、本章からはシベリア、さらには中央アジア平原との交流が浮かびあがる。発想の転換が必要なようだ。

チンギス・カンというと、強大な騎馬軍団を率いて各地を侵略したイメージが強い。だが、当時の武器・防具、戦術、戦跡などが考古学的に示された例は少ない。第11・12・13章では、そのあたりに最新成果から切り込んだ。

なかでも第12章は、モンゴル軍の主要武器である弓矢の特徴を、現代の巧の技から解明しようとする、斬新な試みである。

第14章ではチンギス・カンの墓所をめぐる問題をとりあげた。読者諸賢は、トレジャー・ハンターが好みそうな話題で、研究書になじまないと感じるかもしれない。だが、チンギスの死と墓の問題を掘り下げると、当時の文化はもちろん、現在のモンゴル社会を知るためのヒントも見えてくる。じゅうぶんに学術的テーマなのだ。蛇足だが、私たちのプロジェクトはチンギスの墓探しを目的としていない。よく誤解されるのであえて記す。だいち、モンゴル国の法令で、外国人のチンギス墓探査は認められていない。

第15章では近代内モンゴルにスポットを当てて、政治利用のなかで揺れるチンギス・カンとモンゴルの人々の姿を明らかにした。チンギス・カンは死してなお、人々の心を支配し続けた。モンゴル人は彼をアイデンティティの表象とし、敬い崇拝してきた。現在もまたチンギス・カンが息づく「その時代」の真つ只中だ。フェルトのゲルがコンクリートのアパートになり、馬が自動車に変わっても、「チンギスの子孫」であることに誇りをもつ。そんな純粋な気持ちをも、いくたびか時代が翻弄したことを知ってほしい。

そのほか、歴史の裏側だが、チンギス・カンとその時代を知る上で重要な事柄やフィールドでの体験を、メンバー数人にコラムという形で執筆を依頼した。ひとつの章にしてもよい質・量の寄稿もあったが、検討の結果、当初の方針通りコラムとして収録した。

研究はいまも進んでいる。本書はその一里塚といえる。スタートしたばかりの分野もある。また、執筆後に新たな成果が出た分野もある。いつの日にかヴァージョン・アップした研究成果をご披露できれば幸いである。

本書に収められた研究の数々は、モンゴル国と中国に暮らす多くの研究者・支援者とともに成し遂げられたものであることは言うまでもない。また、日本の先生、諸先輩、友人にも支えられ遂行されたものでもある。紙幅に限りがあるので、お名前を載せることができないが、心より感謝申し上げます。

また、ここまで私たちの調査を御支援いただいたモンゴル国政府、モンゴル科学アカデミー、在モンゴル日本国大使館、総合地球環境学研究所、さらに、資金面で支えてくださった日本学術振興会、三菱財団、トヨタ財団、平和中島財団、JFE二二世紀財団、文化財保護・芸術振興財団に対し、深甚なる謝意を表す。

本書はこれらの御支援のもとで行った研究成果の一部であるが、とくに、平成二二～二六年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)「モンゴル帝国成立史の解明を目指した環境考古学的研究」(課題番号二二四二〇二五)と新潟大学超域学術院プロジェクト「チンギス・ハンの実像と現代的意義の研究」の成果に内容の多くを拠っていることを記す。そして、出版事情厳しき折に、私の無理な願いを快くお引き受けくださった勉強出版の関係各位、とくに細部にわたり適切なアドバイスをいただいた編集担当の吉田祐輔さんに心よりお礼申し上げます。

末筆ではあるが、どうしても書き残したいことがある。

プロジェクトのメンバーから兄のように慕われた自然地理学者の相馬秀廣さんが二〇一二年八月一日に逝去された。奈良女子大学の現役の教授だった相馬さん。六二歳の別れはあまりに突然で早すぎた。

研究フィールドへのあふれんばかりの情熱で、さまざまな分野の研究者を惹きつけた。私も魅せられたひとりである。相馬さんには本プロジェクト発足時からメンバーに加わっていただき、古環境復元と、自然科学の研究者との連携にご尽力いただいた。毎年一度はモンゴルに同行願った。職場が多忙にもかかわらず、嫌な顔ひとつ

せず引き受けてくださった。相馬さんがいなければ、私の研究、そして本書も成り立たなかった。

第13章には西夏防塁についての研究を、私が執筆し、相馬さんをファースト・オーサーとして収録した。これは相馬さんが代表の科学研究費での踏査に基づいている。本来はそちらの報告書に載せるべきであるが、もはや報告書刊行はのぞめない。貴重なデータがお蔵入りすることが危惧された。そこでこのような形にした。関係各位のご理解を賜りたい。相馬さんの現地での考えを尊重しつつ書いたつもりだが、もちろん文責は私にある。

亡くなる三か月前、春まだ浅い候、チンギス・カンの聖地ヘンテイ・ハーン山での調査が、相馬さんの最後のフィールドになった。私にとつても永遠のお別れの場になった。快活な笑い声をあげながら山野を歩く姿が、いまでも脳裏に鮮やかによみがえる。忍び寄る病魔に気づけなかつた自分が情けない。

相馬さん、あなたのことをけっして忘れない。合掌。

二〇一五(平成二七)年 八月

編者 白石典之